

富山県笹川方言における 形容動詞述語形式

——名詞述語と異なる「～ナ」「～ナカッタ」等を中心に——

小西いずみ

キーワード：形容動詞，形容詞，名詞述語，断定，類型論

要 旨

富山県笹川方言における形容動詞述語形式には、名詞述語と同形の「～ジャ/ジャッタ/ジャロー」等とともに、名詞述語とは異なる「～ナ/ナカッタ/ナカロー」等がある。「～ナ」は連体用法のほか終止用法も持ち、また「カ」（疑問の「か」）や「ミタイナ」（みただ）が後続する場合にも使われるが、「～ジャ」は終止用法しか持たない。また、終止用法では、「～ナ」は詠嘆文で、「～ジャ」は真偽判断文で用いられやすいという違いがある。そこで、「～ナ」は、形容詞の「～イ」形と同じように、テンス・モダリティに関して無標の形式であり、「～ジャ」は〈断定〉を表す有標の形式であると考えられる。「～ナカッタ/ナカロー」などの形式は「～ナ+付属的用言カッタ/カロー/…」、名詞述語と同形の形式は「語幹形+付属的用言ジャ/ジャッタ/…」と分析できる。以上から、この方言の形容動詞は、名詞とは異なる述語形式もとるものの、類型論的には名詞的性格が強いと言える。

1. はじめに

Bhat (1994), Wetzer (1996), 松本 (1998) などによると、名詞と動詞はほとんど全ての言語で区別されている基本的な語彙範疇であるのに対し、形容詞はそれらの中間的な存在であるという。言語によっては、物の性質や状態を表す形容詞的語類が名詞か動詞の下位類でしかなく、また、形容詞が独立した範疇を成している言語でも、一般に、名詞か動詞のどちらかに近い文法的振る舞いが見られるのである。そこで、形容詞(的語類)が文法的に名詞に近いか動詞に近いかという観点から諸言語を分類したり(松本 1998)、名詞・動詞と形容詞(的語類)との相対的な距離を論じたりすることができる(Wetzer 1996)。例えば、形容詞が名詞と同じような曲用をするかという点や、形容詞述語が形容詞自体の語形変化によって作られるか、名詞述語のように繫辞を伴って作られるかという点が、名詞らしさ・動詞らしさを測る指標とされる。

そのような類型論的観点から見ると、日本語は、形態的特徴が異なる二つの形容詞的語類、すなわち形容詞(イ形容詞)と形容動詞(ナ形容詞)が存在するという点で注目さ

れる。このうち形容詞は、一般に「～イ/～カッタ/～ケレバ」のような語形変化（活用）をし、単独で述語となることから、類型論的にも動詞的（用言的）と考えられている（松本 1998 など。異論は後述）。一方、形容動詞は、「～ダ/～ダッタ/～ダロー/～ナラ」のように名詞と同形の述語形式をとり、連体修飾の形が「～ナ」であるという点以外、名詞との形態上の決定的な違いがない。形容動詞語幹は、助詞「より」「やら」「か」や助動詞「らしい」などが後接するという点でも形容詞語幹に比べて自立性が強く、名詞に近い性格を持つ（飯豊 1973：190—199）。品詞論上、形容動詞の扱いはしばしば問題とされ、おおまかに整理すると、1) 用言型の独立した範疇（品詞）とみなす立場（ダ/ダッ/タ）等を活用語尾とみなす。学校文法など。最近では影山 1993）、2) 体言型の独立した範疇とみなす立場（寺村 1982 など）、3) 形容詞の下位類とする立場（鈴木 1972、村木 1998 など）^{注1}などがある。品詞論上どう位置付けるにせよ、上記のような振る舞いから、形容動詞語幹が名詞に近い存在であることは認められよう。

ところが、形容動詞の形態的振る舞いは方言によってかなり異なっており、標準語よりも名詞との違いが大きい方言も多い。『方言文法全国地図』第3集などによると、中国・四国や近畿・北陸・九州の一部では、標準語では連体用法しか持たない「～ナ」が終止用法も持ち、「～ナカッタ（だった）」「～ナカロー（だろう）」「～ナケリヤ（なら）」のような形容詞と共通の形を含む形式、「～ニアッタ」「～ナッタ」や「～ニアロー」「～ナロー」のような「～ニ+アル」と分析できる（または、通時的にはそれに由来する）形式も見られ^{注2}る。さらに、福岡市方言には、「～カ」「～カッタ」「～カロー」など、形容詞と区別がつかない形式がある（陣内 1982、同 1996、早田 1985：98—107）。琉球の一部の方言においても、いわゆる「サアリ活用」において、形容詞と形容動詞の形態的な区別がなくなるようだ。また、東北には「～ダ」が連体用法も持つ方言が広く分布するが、なかでも秋田県雄勝方言では「～ダガッタ（だった）」という形式があるという（高橋 1986）。

これらの諸形式のうち、終止形の「～ナ」や「～ニ+アル」型の形式は近畿中央方言の歴史にも見えるが、「～ナカッタ」「～ダガッタ」「～カッタ」などの形容詞と類似した形のは近畿中央方言の歴史には確認できない。これらは、通時的には、形容動詞が形態的に形容詞に類似・同化する方向へ変化したと言える。そのような変化の原因の一つは、形容詞と形容動詞とが意味的にも統語的にも近い特徴を持つためだろうが、具体的にどのような変化過程を経て現在の形式が成立したのかは明らかでない。そのような通時的研究のためにも、まずは個々の方言の共時的な記述と分析が必要である。本稿では、「～ナカッタ」などの形容動詞述語形式を持つ方言の一つとして、富山県下新川郡朝日町笹川（しもにいわぐん あさひまち ささがわ）方言をとりあげ、その形容動詞述語形式を、名詞や形容詞の述語形式との異同に注目しながら、記述・分析する。

2. 調査および調査地点について

本稿の記述・分析は、笹川方言話者をインフォーマントとする面接質問調査の結果に基づく。調査期間は1997年8月～2001年1月。インフォーマントは折谷政子氏と竹内次子氏。二人とも1930(昭和5)年生まれの女性で、外住歴はない。

図1からも分かるように、朝日町は富山県最東部に位置する。朝日町と新潟県との境は北アルプスの北端にあたり、その面積の大部分が山地である。笹川は、笹川(集落と同名の川)の河口を約4kmさかのぼった谷沿いにある集落である。

インフォーマントの持つ音韻体系はほぼ標準語と同じである。音声的には/si, zi/の母音が中舌化することがあるが、音韻的には/su, zu/と区別されるようだ。また、/se, ze/の子音が口蓋化するという音声の特徴もある。アクセントは、標準語・東京方言と同じく、ピッチの下降の有無と位置が弁別の特徴となる。

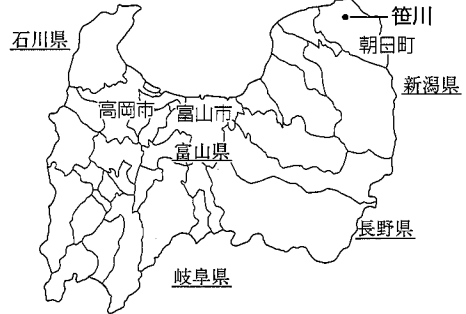


図1：調査地点図

3. 笹川方言の形容動詞述語形式概観と問題点の再確認

(1)	名詞		形容動詞		形容詞	構文上の用法や意味、+後統語句
	ホン(本)	シズカ'(静か)		タカ(高)		
(a)	～ジャ	～ジャ	～ナ	～イ	終止	非過去・断定(非推量) (～だ。/～い。)
(b)	～ジャッタ	～ジャツタ	～ナカ'ッタ	～カ'ツタ		過去(～だった。/～かった。)
(c)	～ジャロ'(-)	～ジャロ'(-)	～ナカロ'(-)	～カロ'(-)		推量(～だろう。/～いだろう。)
(d)	～ジャレ'ド	～ジャレ'ド	～ナカレ'ド	～カレ'ド	条件	逆接確定条件(～だけれど/～いけれど)
(e)	(注1) ～ナラ	(注1) ～ナラ	(注2) ～ナケリヤ'	(注2) ～ケリヤ'		順接仮定条件(～なら/～ければ)
(f)	～ノ	～ナ		～イ		+体言 +ヨ一'ナ・ヨ一'ジャ(様態「ようだ」)
	～ナ					+ガ(準体助詞「の」)
(g)	～φ	～ナ		～イ		+カ・ケ(疑問「か」) +ヤ'ラ(助詞「やら」) +カ'モシレ'ン(かもしれない) +ミタイナ・ミタイジャ(みたいだ) +ヤ(詠嘆)
(h)	～デ	～デ		～テ		中止(～で/～く(て))
(i)	～ジャ ～デ	～ジャ ～デ		～φ		+ナ'イ(否定「ない」)

(j)	～ニ	～ニ	～φ	+ナル(なる) +スル(する)
(k)			～(イ)ナト	+その他の動詞(「静かに歩く」「高く上げる」 など、副詞的修飾のとき)

(注1) 前接語が有アクセント核のとき～ナラ、無核のとき～ナラ

(注2) ～ナケリヤ、～ケリヤというアクセントもある

(1)に、笹川方言の形容動詞が文法的機能・意味に応じてどのような形式をとるかを、名詞、形容詞の場合とともに整理した。名詞は「ホン(本)」、形容動詞は「シズカ(静か)」、形容詞は「タカ-イ(高い)」を例とする。形容詞における「～イ」「～テ」などの「～」は、語幹末にアクセントが来ることを表す。標準語の「～だ」^{注4}に対応する形式には新形の「～ヤ」や古形の「～ヂャ」もあるが、最も多く使われる「～ジャ」で代表させる。

(1)の「シズカ」と同じ形式をとることを確認した語を(2)に示す(「シズカ」も含める)^{注5}。ただし、「スキ」以下の5語は、終止用法の「～ナ」、過去を表す「～ナカッタ」をとりにくい。その理由については4節で考察する。また、標準語の「ようだ」「みたいだ」「そうだ(様態)」にあたる助動詞も形容動詞に準じた形式をとる。^{注6}

- (2) ハデ(派手) [2], ヘタ(下手) [2], マメ(達者) [0,2], シズカ(静か) [3], ハンジョ(にぎやか) [1], マジメ(まじめ) [1,3], フシギ(不思議) [0,3], ゼータク(贅沢) [3], シンパイ(心配) [0,3], スキ(好き) [2], キライ(嫌い) [0], オモ(主) [2], ムリ(無理) [1], ヨケー(余計) [0,3]

()内は意味, []内はアクセントの位置

先に(1g)の後続語句の一つ「ヤ」について補足しておく。「ヤ」は、名詞・形容詞・形容動詞のほか、動詞のル形など、他の用言の基本形(いわゆる終止・連体形)にも付く(ただし、(1)からも分かるように「～ジャ」には付かない。4.1節も参照)。知覚した事態に対する話し手の感動・驚きを表出する、いわゆる詠嘆文において用いられ、対象の性質や話し手の感情の程度が極端であることを表す。^{注7}〈詠嘆〉を表す終助詞と言えるだろう。標準語では「なんて～のだ(ろう)」という形式がもっとも近い。そのような意味を持つため、程度性のない語句には付かず、名詞句・動詞句の場合には程度性を含む連体・連用修飾語句を必要とする。

- (3) ウマソーニ ノムヤー。=なんておいしそうに飲むんだろう！
 (4) イチャケナ コヤー。=なんてかわいい子だろう！
 (5) *ココニ オルヤー。(ココニ オル=ここに居る)

また、実際の発話においては長音化するのが普通で、「ヤ」が承ける句内のアクセント核が実現せず、全体が高く平らになるという韻律的特徴も持つ。

ここで問題なのは、形容詞に「ヤ」が付くとき、(1)では「～イ+ヤ」としたが、表層的には次のように語幹形に「ヤ」が付いたように見えることである。

- (6) タカヤー。=なんて高いんだろう！

しかし、動詞や他の用言では終止・連体形に付くのに形容詞の場合のみ語幹形に付くのは不自然である。そこで、基底では/taka-i+ja/のように「～イ」に付いており、/i+ja/→/ja/という縮約規則によって/takaja/のようになるとみなし、(1g)に含めておいた。

形容動詞についての議論に戻ろう。(1)から、笹川方言の形容動詞では、「～ナ」の形(以下、ナ形と呼ぶことがある)が、連体用法だけでなく終止用法も持ち、また、疑問の終助詞「カ」「ケ」や「ミタイナ」などの語が後続する場合(1g)にも用いられることが分かる。「～ナ」の用法は、ちょうど形容詞の「～イ」の形(イ形)の用法と一致する。また、「～ジャッタ/ジャロー/ジャレド/ナラ」という名詞述語と同形の形式とともに、「～ナカッタ/ナカロー/ナカレド/ナケリヤ」という名詞とは異なる形式があるのも標準語の形容動詞にはない特徴である。(1)からも分かるように、これらの形式は、少なくとも外形的には、「～ナ」に形容詞述語に含まれる「カッタ/カロー/カレド/ケリヤ」が付いた形をしている。これらの述語形式は、1節で述べたように他の西日本方言にも見られるものである。下に例をあげておく。

- (7) アカ {シズカジャネー。/シズカナネー。}=あそこは静かだねえ。
 (8) アンタ アノヒトノコト {シンパイジャロー。/シンパイナカロー。}
 =あなた、あの人のことが心配だろう。
 (9) ソイ {シズカナラ/シズカナケリヤ} オラモ スンデミタイワ。
 =そんなに静かなら私も住んでみたいよ。

中止用法や「ナイ」「ナル」「スル」が続くときには名詞と同じ形式しか見られない。名詞にはない副詞的修飾用法では、標準語と同じく「～ニ」の形をとる。

形容詞の「～かつ(た)」や「～かる(う)」といった述語形式は、歴史的には形容詞の「～く」形にいわゆる補助動詞「あり/ある」が付いた迂言的な形式に由来すると言われているが、現代標準語の文法においては、「かつ(た)」「かる(う)」などを形容詞の語尾とみなすのが普通である。つまり、1節でも触れたように、日本語の形容詞は、それ自体が活用するもの、すなわち用言と分類され、典型的には動詞的とされるのである。標準語に限らず、諸方言の文法においても、形容詞を用言とみなすのが一般的である。笹川方言の形容動詞は、「～ナ」「～ナカッタ」等の述語形式を持つという点で、標準語よりも名詞との形態上の違いが多く、形容詞に類似する点が多い。では、笹川方言の形容動詞は、より用言らしい・動詞らしいということになるのだろうか。

この問題については、二つの観点から検討しなくてはならない。一つは、現代標準語の形容詞を動詞的とみなすこと自体、再考の余地があるということである。副島(2001)は、「高くありません」「高く(は)あろう」など「ある」が顕在化する形式が存在することから、現代語の形容詞の述語形式も、基底では「～く+ある」という迂言形式であるとし、また、形容動詞や名詞の述語形式「～だ」も「～で+ある」という分析が可能だと論じている。すなわち、形容詞・形容動詞は、それ自体が活用して述語形を作るので

はなく、繋辞「ある」と共起して述語となるのであり、どちらも類型的には名詞に近い存在だという。もう一つは、当然ではあるが、それぞれの方言、ここでは笹川方言の文法的事実に則した検討である。現代標準語の形容詞・形容動詞についての副島の論が妥当であるとしても、笹川方言にはあてはまらない。形容動詞の述語形式「～ナカッタ/ナカロー/…」に含まれる「カッタ/カロー/…」は、通時的には形容詞の述語形式「～カッタ/カロー/…」の再分析によって析出されたと考えられるからである。

では、これらの述語形式は共時的にはどう分析できるだろうか。以下では、まず、形容動詞のみに見られる述語形式「～ナ/ナカッタ/ナカロー/ナカレド/ナケリヤ」について、それに用法や意味・機能が対応する「～ジャ/ジャッタ/ジャロー/ジャレド/ナラ」と対照させながら考察・分析していく。そして、その分析に基づいて笹川方言の形容動詞の類型論的位置付けについて再考したい。

4. 分析

4.1 「～ナ」

まず、「～ナ」について「～ジャ」と対照しながら検討する。前節でも述べたように、「～ナ」は、連体用法ばかりでなく終止用法も持ち、また、疑問の「カ」「ケ」等(1g)の語句が後続する場合にも使われる。その用法は、ちょうど形容詞のイ形の用法と一致する。標準語の形容動詞では、(1g)に相当する語句が後続する場合には語幹形が用いられ、また、「ここは静か。」のように、語幹形で文を終止することも可能である。笹川方言のナ形は、標準語の語幹形の用法をカバーしていると言える。それに対して、「～ジャ」は、標準語の「～だ」と同じように、終止用法しか持たず、連体用法や(1g)の語句が後続する場合には用いられない。^{注8}

終止用法においても、「～ナ」と「～ジャ」の用いられ方は等しいわけではなく、詠嘆文で「～ナ」が用いられやすく、真偽判断文で「～ジャ」が用いられやすいという違いがある。ここで詠嘆文と呼ぶのは、次のようなものである。^{注9}

(10) (現在いる場所がとても静かなことに気付いて) シズカナヤー。=静かだなあ。

(11) (現在いる場所がとても静かなことに気付いて、隣の友人に)

シズカジャネー。/シズカナネー。=静かだねえ。

(12) (以前に行った場所を思い出しながら、一緒に行った友人に)

アカ {シズカジャネー。/シズカナネー。}=あそこは静かだねえ。

(10)は3節で触れた詠嘆の「ヤ」を用いた文である。発話時点において知覚したその場の「静かさ」に対する話し手の感動を表しており、詠嘆文の典型的なものと言える(益岡1991:87-89)。この文では「～ジャ」は不可である。(11)(12)は終助詞「ネ」を用いた文である。(10)と同じように対象・事態に遭遇したときの知覚内容に対する発話者の感動を表す詠嘆文だが、聞き手をめあてとする対話文である点、さらに(12)は対象を知覚し

た時点と発話時点が一致しないという点で、典型からは外れたものである。これらでは「～ジャ」も可能だが「～ナ」のほうが用いられやすい。

次のような詠嘆文以外の文でも「～ナ」は使われる。したがって「～ナ」を〈詠嘆〉を表すモダリティ形式とみなすことはできない。ただし、(15)では「～ジャ」のほうがより自然だと内省される。

(13) (「今日あの家は静かか?」と聞かれて) シズカナワ。/シズカジャワ。=静かだよ。

(14) オラ アノヒト {シンパイナワ/シンパイジャワ}。=私はあの人が心配だよ。

(15) (「あの人はまじめか?」と聞かれて) マジメジャ。/マジメナ。=まじめだ。

(13)(14)は対象や話し手の一時的な状態を述べているのに対し、(15)は主題である「あの人の」、「まじめ」という超時間的・恒常的な性質を述べている。文の意味的タイプから言えば、前者は話し手の知覚を通して捉えられたことを客観的に述べる文(いわゆる「現象描写文」)、後者は対象についての話し手の判断を述べる文(いわゆる「(真偽)判断文」)にあたる。真偽判断文において「～ナ」よりも「～ジャ」が用いられやすい傾向は、次のような文でより明確になる。

(16) アノッサン ウドン {スキジャワ。/*スキナワ。}=あの人はうどんが好きだよ。

(17) オラ アノヒト {スキジャワ。/*スキナワ。}=私はあの人が好きだよ。

(18) コノ シゴトガ {オモジャワ。/*オモナワ。}=この仕事が主だよ。

(19) ソリャ {ムリジャ。/*ムリナ。}=それは無理だ。

(20) ソノ ゼンナ {ヨケージャワ。/*ヨケーナワ。}=そのお金は余計だよ。

(16)(17)では「スキ」を「キライ」に変えても「～ナ」が不可である。「スキ」「キライ」は、意味的な分類では「感情形容詞」とされるが、一般の感情形容詞が一時的な感覚・感情を表すのに対し、持続的・恒常的な感情を表すという点で特殊である。^{注10} 文の意味的類型としては、(16)は、(15)と同じく、対象(あの人の)性質(うどんが好き)についての話し手の判断を述べた真偽判断文と言える。(17)は、話し手の対象に対する感情を述べた文だが、話し手の判断を述べている点では、(15)(16)と同じである。また、(18)～(20)の述語「オモ」「ムリ」「ヨケー」は、対象自体が持つ状態・性質ではなく、他の事物や一般的な基準から見た評価的なあり方を表す。^{注11} そのため、これらを述語とする文は、基本的に話し手の判断を述べる文だと言えよう。

(15)と同じ「あの人はまじめ」、(16)と同じ「あの人はうどんが好き」という命題を持つ文でも、(21)(22)のような詠嘆文では「～ナ」が積極的に用いられる。つまり、「～ナ」と「～ジャ」のどちらが用いられやすいかは、必ずしも語によって決まっているのではなく、対象に対する詠嘆の気持の表現か、対象についての判断の表現かといった、文全体の意味に関わっているのである。

(21) (その人の熱心に働く姿を思い出しながら)

アノヒトア マジメナネー。=あの人はまじめだねえ。

(22) (人がおいしそうにうどんを食べるのを見ながら)

アノッサン ウドン スキナネー。=あの人、うどんが好きだねえ。

「キライ」「オモ」などは、そのような詠嘆文を作ることができず、終止用法の「～ナ」は確認できないが、連体用法や「カ」「ミタイナ」等(1g)の語が後続する場合は「～ナ」が用いられる。すなわち、これらが「～ナ」という形自体を持たないわけではない。

以上、詠嘆文では「～ナ」のほうが用いられやすく、真偽判断文では「～ジャ」のほうが用いられやすいという違いがあることを見てきた。中世から近世期における近畿中央方言(上方語)においても、終止形として「～ナ」と「～ジャ」が併存していたことが知られているが(坪井1981)、矢島(1994)によれば、近世前・中期上方語の形容動詞文では、「～ナ」は対象の在り方に対する捉え方をそのまま描述する場合に使われ、「～ジャ」は対象を主題として取り立て、それについての知識や本質的な属性、及び思考を経た上での判断などが述べられる場合に使われるという。さらに、矢島は、ナ終止文の特性は、対象の存在のしかたを表す「連用形ニ」+「補助動詞アリ・アル」に、ジャ終止文の特性は、主題に対する述部を構成する機能を基本とする「連用形デ」+「補助動詞アリ・アル」に由来すると論じている。近世期上方語における「～ナ」と「～ジャ」の相違は、笹川方言におけるそれらの違いによく似ている。通時的には、笹川方言の「～ナ」と「～ジャ」もそれぞれ「～ニ+アル」と「～デ+アル」に由来すると思われる。しかし、共時的には、「～ニ+アル」や「～デ+アル」に分析するのは困難である。

共時的には、「～ナ」は、形容詞のイ形と同じように、テンスやモダリティに関する特定の意味を積極的に表さない形式であり、「～ジャ」は<断定>を表す真偽判断のモダリティ形式であるとみなすことができる。名詞述語・形容動詞述語の活用のパラダイムにおいて、^{注12}「～ナ」は無標形、「～ジャ」は、ムードに関しては<断定>を表す標識「ジャ」を持った有標形であると言ってもよいであろう。^{注13}その場合、名詞述語の無標形は「名詞+φ(ゼロ)」、形容動詞述語の無標形は「～ナ」とみなす。そう考えることによって、非断定のモダリティ形式「カ」「カモシレン」「ミタイナ/ミタイジャ」等の語句が後続するときに「～ジャ」が用いられないことも説明できる。

真偽判断文で「～ナ」より「～ジャ」が好まれるのも、「～ナ」が判断のあり方を積極的に表さない形式であり、「～ジャ」が<断定>を表す形式であることに起因すると考えれば説明できる。典型的な詠嘆文は、発話時点で知覚したことをそのまま言語化するという点でいわゆる未分化文と連続しており、未分化文は判断系のモダリティとは無縁であるが、詠嘆文も、判断系のモダリティからは遠いタイプの文と考えられる(益岡1991: 87-89)。詠嘆文で「～ジャ」より「～ナ」が好まれるのはそのためだろう。

4.2 「～ナカッタ」「～ナカロー」などの形式

次に、「シズカナカッタ」「シズカナカロー」「シズカナカレド」「シズカナケリヤ」な

どの形式について検討したい。3節でも述べたように、少なくとも通時的には、形容詞の述語形式「～カッタ/カロー/…」の再分析によって「カッタ/カロー/…」が析出され、それが形容動詞の「～ナ」形に付いて成立したと考えられる。ここで問題とするのは共時的にどうみなすかであるが、恐らく共時的にも、これらの述語形式は「語幹+語尾ナカッタ/ナカロー/ナカレド/ナケリヤ」と分析すべきではなく、4.1節で見た形容動詞の「～ナ」形に、付属的な用言/kar/ (カッタ/カロー/カレド/ケリヤ) が付いたものと考えられる。この分析では、〈過去〉〈推量〉〈逆接確定条件〉〈假定条件〉といった文法的意味は、それぞれ「カッタ」「カロー」「カレド」「ケリヤ」が表しているとみなす。つまり、形容動詞自体がテンスやムードといった文法的(形態論的)カテゴリーを分化させているのではないということになる。

この解釈の根拠は、「～ナカッタ」「～ナカロー」などの形式が、韻律的に「～ナ」と「カッタ/カロー/…」という二つの単位から成ることである。これらの形式は、(1)からも分かるように、「シズカ'ナカ'ッタ」「シズカ'ナカ'ロー」など、二つのアクセント単位から成る。その単位の区切りが「シズカ」の後にはなく「シズカナ」の後にあるとみなすのは、インフォーマントが調査者(筆者)に分かるようにゆっくりと発音するときに、「シズカ'ナ, カ'ッタ」「シズカ'ナ, カロー」のように、「～ナ」の後にポーズを置くことがあるためである。また、調査者が「シズカ', ナカ'ッタ」と発音すると、「シズカ'ナ, カ'ッタ」と訂正される。つまり、ポーズの位置は任意のものではなく、形態論的な単位の区切りを示すと考えられる。しかも、このようなポーズが許されるということは、語幹と「ナ」の結び付きよりも、「ナ」と「カッタ/カロー/…」の結び付きのほうが緩いことを示唆する。そこで、「カッタ/カロー/…」は、形容動詞の「語尾」ではなく、テンスやムードの分化のために必要とされる付属的な用言とみなすほうが適当だと思われる。(1)では、「シズカジャナイ」「タカナイ」などの「ナイ」を〈否定〉を表す別語としたが、それと同様のものとみなすのである。

4.1節では、「～ジャ」と「～ナ」では、文の意味的類型によって用いられ方に違いがあることを見た。「～ジャッタ/ジャロー/…」と「～ナ+カッタ/カロー/…」にもそのような違いがあるのかを確認しておこう。「～ナ+カッタ/カロー」は(23)(24)のような詠嘆文で用いられやすいが、(25)(26)のようなそれ以外の文でも用いられる。この点は「～ジャ」と「～ナ」の違いと共通している。

(23) (以前に行った場所を思い出して)

アカ{シズカジャッタヤー./シズカナカッタヤー。}=あそこは静かだったなあ。

(24) (友人の家に初めて来たとき、車通りがとて少ないのに気づいて)

コカ {シズカジャロゲ./シズカナカロゲ。}=ここはさぞ静かだろうね。

(25) (「昨日あそこは静かだったか?うるさかったか?」と聞かれて)

シズカナカッタヨ./シズカジャッタヨ。=静かだったよ。

(26) 「今日あの家は静かか？」と聞かれて)

キョーワ {シズカジャロガ。/シズカナカロガ。}=今日は静かだろうよ。

(27) のような話し手の判断を表す文では「～ナカッタ」よりも「～ジャッタ」のほうが用いられやすい。また「スキ」「ムリ」等の語ではそれが顕著になる。この点も「～ジャ」と「～ナ」の場合と同じである。

(27) (故人について「あの人はまじめだったか？」と聞かれて)

マジメジャッタ。/マジメナカッタ。=真面目だった。

(28) オラ アノヒト {スキジャッタ。/*スキナカッタ。}

=私はあの人が好きだった。

(29) ソリヤ {ムリジャッタ。/*ムリナカッタ。}=それは無理だった。

ただし、「～ナカロー」ではそのような傾向が薄れ、「オモ」等でも「～ナカロー」が可能である。

(30) コノシゴトガ {オモジャロワイ。/オモナカロワイ。}=この仕事が主だろうよ。

「～ジャレド/ナラ」と「～ナ+カレド/ケリヤ」には特に違いがない。「オモ」等の語ではどちらかと言えば前者のほうが好まれるが、後者も可能である。

(31) ソノシゴトガ {オモナラ/オモナケリヤ} ヒキウケン。

=その仕事が主なら引き受けない。

仮定条件を表す形式には、標準語の「～たら」に相当する「～タチャ」という形式もあるが、「オモナカッタチャ(主だったら)」などの形式が可能である。また、順接確定条件表現は、「～ジャ」「～ナ」に、接続助詞「カライ」(標準語の「から」相当)を付けて表されるが、この場合も「オモナカライ(主だから)」等の形式が可能である。

以上のような「～ジャッタ/ジャロー/…」と「～ナ+カッタ/カロー/…」の用いられ方は、「～ナ」が、それ自体はテンスやモダリティに関する特定の意味を表さない形で、「カッタ/カロー/…」がそれらの文法的意味を表す付属的な用言であるとする上述の解釈と矛盾しない。「～ナ+カッタ」が真偽判断文で使われにくいのは、「カッタ」が判断系のモダリティに関しては無標の形式であり、「～ジャッタ」は「～ジャ」と同じように〈断定〉を表す形式であるためと考えられる。一方、「～ナ+カロー」のほうは、「カロー」が〈推量〉を表すため、また、「～ナ+カレド」「～ナ+ケリヤ」「～ナ+カッタチャ」や「～ナ+カライ」の場合も、「カレド」「ケリヤ」「カッタチャ」「カライ」が〈逆接確定条件〉〈順接仮定条件〉〈順接確定条件〉といった文法的意味を表すため、語の意味による制限がなく用いられるのだろう。

4.3 名詞述語と同形の形式

すでに見てきたように、笹川方言の形容動詞述語の形式には、名詞述語と同形の「～ジャ/ジャッタ/ジャロー/ジャレド/ナラ/デ/ジャ・デ(＋ナイ)/ニ(＋ナル・スル)」がある。

これらは標準語の「～だ/だった/…」に対応するものであり、その分析についても共通の論点が多いだろうが、本稿における一応の結論を出しておきたい。

4.2節では形容動詞述語に特有の形式を分析する際に、アクセント単位を形態論上の単位を表すものとして重視してきた。その立場からは、この系列の形式も「シズカ'ジャロー」 「シズカ'ジャレド」のようにアクセント的に2単位であることから、語幹形に付属的な用言「ジャ/ジャッタ/…」が付いたものと分析するほうが適当だと思われる。すなわち、これらの形式においても、形容動詞自体ではなく、それに付加される付属的な用言がテンスやムードといった形態論的カテゴリーを分化させていると考えられる。ただし「～ニ」は格形式とみなすこともできよう。

この分析の問題点は二つある。一つは、副島(2001)による標準語の形容動詞についての論のように、「～ジャ」を「～デ+アル」の縮約形とみなせるかもしれないということである。しかし、笹川方言では「アル」が顕在化した形式が得られず、この分析をとる積極的な論拠はない。また、笹川方言では「～ジャ」に変わって新形の「～ヤ」も用いられるが、「～ヤ」を「～デ+アル」の縮約形とみなすのは困難である。もう一つは、影山(1993)による「形容名詞」(本稿でいう形容動詞)についての論との整合性である。影山は、下のような等位接続構文などにおいて、名詞に伴う「に、で、の」は削除可能であるのに対し、形容名詞の「に、で、な」は削除不可能であるという形態的緊密性に注目して、名詞とそれに続く「だ、で、に」は句であり、形容名詞基体と「～だ、～で、～に」は語であると論じている。

(32)a. 兄は大学卒(で)、弟は高校卒だ。

b. 兄は穏やか*(で)、弟は活発だ。 影山(1993:369)の(97)より

*()は、括弧内の要素がなければ不適格なることを示す。

笹川方言の同様の構文においても、形容動詞の場合には「ニ、デ、ナ」を削除できないようであり、確かに「名詞+ニ、デ、ノ」よりも「形容動詞語幹+ニ、デ、ナ」のほうが結び付きが緊密だと言えよう。しかし、「形態的緊密性」という条件は、その形態が語であることを示す必要条件であるが十分条件ではなく、句内の語の結び付きの程度はさまざまであるとする立場にたてば、上記の問題は回避できる。確かに、名詞よりも形容動詞のほうが「ニ」や「デ」等との結び付きが緊密だが、それは名詞と形容動詞語幹形の自立性の違いに由来するのであって、そのこととそれらに付く「ジャ/デ/ニ」の同一性とは別問題だと考えるのである。

5. 類型論的位置付け

4節では、笹川方言の形容動詞の諸形式は、形容動詞自体の語形変化ではなく、形容動詞に付属的な用言「カット/カラー/…」や「ジャ/ジャッタ/…」が付加したものと分析できると論じた。ここで問題なのは、「～ナ」が、単独で終止用法を持つことであろう。

しかし、すでに見たように、ナ形には、真偽判断文では用いられにくいという制限がある。つまり、述語形としては汎用性を欠き、十分に発達したものとは言えない。また、標準語において形容動詞の語幹形や単独の名詞が終止用法を持つことから考えても、「～ナ」で終止することがそれを用言とする根拠にはならない。結局、笹川方言の形容動詞は、標準語の形容動詞に比べて名詞述語との違いが大きいものの、4節で見たように、述語として機能するために必要とされるテンスやムードといった文法的カテゴリーが、形容動詞自体に現れていないという点を考慮すると、類型的にはいまだ名詞的(体言的)性格が強い^{注16}と言えよう。なお、この結論から言えば、当該の語彙を「形容動詞」と呼ぶのは不適切で、「形容名詞」や「名詞的形容詞」などと呼ぶほうが適当であろう。

形容動詞述語形式「～ナカッタ」等が、「～ナ+ /kar/ (カッタ/カロー/…)」だとすると、形容詞述語形式「タカカッタ」「タカカロー」等も、「語幹+語尾」ではなく、「語幹形+ /kar/」と分析するべきかもしれない。ただし、形容詞述語形式は、形容動詞の場合とは異なり、「タカカッタ」「タカカロー」などのようにアクセント的には1単位となる。これは、/kar/が付くときには語幹のアクセントを消去するという規則を設けることによって解決できるだろう。しかし、そもそもそのようなアクセント上の違いが生じるのは、形容動詞の場合は「～ナ」という自立的な形式に/kar/が付くのに対し、形容詞の場合は語幹形という非自立的な形式に/kar/が付くことに関係する。形容動詞と/kar/よりも、形容詞と/kar/のほうが結び付きが緊密だと言える。名詞的か動詞的かという二項対立的な議論ではなく、名詞らしさ・動詞らしさの相対的な程度を問題にするなら、形容動詞よりも形容詞のほうが動詞らしいと言えよう。

/kar/は、(副島(2001)にしたがえば)標準語の形容詞・形容動詞の述語形式に必要とされる繫辞「ある」と同じ機能を果たしている。/kar/も繫辞と呼んでよいかもしれない。しかし、標準語の形容詞・形容動詞の述語形式における「ある」は存在動詞という自立的な形式でもあるのに対し、/kar/のほうは、それ自体が自立した形式として用いられることはない。そのため、標準語の「静かではある」のような、「～ナ」を「ワ」「モ」によってとりたてた「*シズカナワカロー(静かではあろう)」などの形式はあり得ない。

6. まとめ

本稿では、富山県笹川方言の形容動詞述語形式について、名詞や形容詞の述語形式との異同に注目しながら論じてきた。本稿で述べたことをまとめると、次のようになる。

- 笹川方言の形容動詞述語形式には、名詞述語と同形の「～ジャ/ジャッタ/ジャロー/…」とともに、名詞述語とは異なる「～ナ/ナカッタ/ナカロー/…」がある。
- 「～ナ」は連体用法ばかりでなく、終止用法でも用いられ、「カ」(疑問の「か」)や「ミタイナ」(みたいだ)が後続する場合にも使われるのに対し、「～ジャ」は終止用法しか持たない。また、終止用法においても、「～ナ」が詠嘆文で用いられやすく、「～ジャ」

が真偽判断文で用いられやすいという違いがある。そこで、「～ナ」は、形容詞の「～エイ」形と同じように、テンス・モダリティに関して無標の形式であり、一方「～ジャ」は〈断定〉を表す有標の形式であると解釈できる。

- 「～ナカッタ」「～ナカロー」等の述語形式は、韻律的に2単位から成ることから、「～ナ」に付属的な用言「カッタ/カロー/…」と分析できる。また、名詞述語と同形の形式も、語幹形に付属的な用言「ジャ/ジャッタ/…」が付いたものと分析できる。したがって、形容動詞自体がテンスやムードといった文法的カテゴリーを分化させているとはみなしにくく、名詞的(体言的)性格が強いと言える。
- 形容詞の述語形式についても、「語幹形+カッタ/カロー/…」という分析が可能だが、形容動詞の場合とは違い、韻律的に1単位から成る。そこで、少なくとも形容動詞よりは動詞に近い位置に位置付けられる。

注1 形容動詞の研究史については柏谷(1973)に整理されている。

注2 ほか、飯豊他編(1982-1984)、大西(1997)、小西(1999)を参照。中国・四国方言については高橋顕志『中国・四国言語地図』(<http://home.hiroshima-u.ac.jp/hoogen/>)も参照。

注3 ただし「～ナロー」には「～ナ+推量辞ロー」と分析できるものが含まれているだろう。

注4 この方言では、語幹が2モーラ以上の形容詞のアクセントは1型であり、(1)の「～」に各語の語幹を代入すれば、アクセントも含めた実現形を得ることができる。語幹が1モーラの「無い」「良い」は、異なるアクセントを持ち、形態論的にも例外的な振る舞いを見せる。また、(1k)に記したように副詞的修飾用法で「～ナト」という形をとるという特徴がある。

注5 「ゼータク」「シンパイ」は、「ゼータクワ キライジャ」「シンパイ イラン」のように名詞としても用いられるが、その他の点では他の語と変わらない。本稿では、形容動詞語幹としての「ゼータク」「シンパイ」とは別に名詞としてのそれらが存在するとみなしておく。

注6 伝聞の「そうだ」に相当する助動詞も形容動詞に準じた形式をとる。これは用言のいわゆる終止形((1a)の形式)に後続するが、形容動詞の場合は「～ナ」に付くことが多く、「～ジャ」には付きにくい。ただし、この形式自体あまり用いられないようなので、詳しく調査しなかった。

注7 ここでいう詠嘆文は、益岡(1991: 87-89)の「詠嘆系」の表現にほぼ該当するが、「感動」だけでなく「驚き」も含める点、「主題」を持つ文や聞き手に対する話し手の伝達態度を表す「ネ」などの形式を持つ文も含める点で「詠嘆系」の一部も含んでいる。

注8 否定を表す「～ジャ+ナイ」の「～ジャ」は、別の形式とみなしておく。少なくとも通時的には終止形の「～ジャ」は「～で+ある」に由来し、「ナイ」に付く「～ジャ」は「～で+は」に由来する。

注9 3節の詠嘆の終助詞「ヤ」についての記述および注6も参照されたい。

注10 (16)のように、平叙文における主語の人称が制限されないという統語的な特徴にもそれが現れている。西尾(1972: 25,30)、樋口(1996: 56)を参照。

注11 その意味が反映された形態・統語的な特徴として、様態の「ソーナ/ソージャ」が付かない(付きにくい)こと、「サマ(様)」を修飾しにくいことが指摘できる。また、これらの語に

詠嘆「ヤ」や過度の程度を表す「スギル」が後続しにくいことから、程度性を持たないことも分かる。

注12 「真偽判断」というモダリティの下位カテゴリー、およびそれを構成する対立項の一つ〈断定〉については益岡(1991:51-53)に依る。

注13 ただし、ある文法的カテゴリーに関する無標形と有標形は、動詞の「〜ル」形と「〜タ」形のように、同じ統語的環境において意味的に対立することが多いが、ここでの「〜ナ」形と「〜ジャ」形は(11)〜(15)に示したように明確な対立を見せない。また、ここでは「活用」という用語を、屈折的な手段(語尾の変化)によるだけでなく、膠着的な手段(接辞の付加)も含めて、文法的意味・機能に応じて形式を変化させることという意味で用いている。後述のように、本稿では、名詞・形容動詞自体が屈折して述語形になると考えているわけではない。なお、ここでの「〜ジャ」についての議論は、標準語の名詞・形容動詞の述語形式「〜だ」についてもあてはまるであろう。「〜だ」は、動詞のル形や形容詞のイ形と並んで、名詞・形容動詞述語の基本形と位置付けられることが多いが、「だろう」「か」「かもしれない」「みたいだ」「らしい」などのモダリティ形式が名詞述語・形容動詞述語に付く場合は名詞・形容動詞語幹に直接付く(あるいは、基本形から「だ」を削除する)などの、特に動機づけのない例外的な規則を設けなければならない(例えば、鈴木1972:419,479-490;寺村1984:221;城田1998:326-354)。

注14 ここでは「カッタ/カロー/カレド/ケリヤ」は同じ用言の活用形とみなし、抽象的な基本形を仮に/kar/としておいた。

注15 ただし、「カッタ/カロー/…」よりも「ナイ」のほうが自立性が高い。鈴木(1972:414)が、「ない」を「むすび」(繫辞)、「だ」を「むすびのくつつき」(繫辞と同様のはたらきをする付属辞)としていることを参照。

注16 ここで述べていることはあくまで「名詞的性格が強い」ということであって、形容動詞語幹が名詞そのものであると言っているわけではない。

引用文献

- 飯豊毅一(1973)「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」鈴木・林編(1973)所収
 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編(1982-84)『講座方言学』4-10 国書刊行会
 柏谷嘉弘(1973)「形容動詞」の成立と展開」鈴木・林編(1973)所収
 大西拓一郎(1997)「活用の整合化——方言における形容詞の「無活用」化、形容動詞のダナ活用の交替などをめぐる問題」加藤正信(編)『日本語の歴史地理構造』明治書院
 影山太郎(1993)『文法と語構成』ひつじ書房
 小西いづみ(1999)「形容動詞特殊活用の分布について」(発表要旨)『都立大学方言学会会報』141
 城田 俊(1998)『日本語形態論』ひつじ書房
 陣内正敬(1982)「新方言「下手い」について——福岡市方言の形容詞活用——」『九大言語学研究室報告』3号
 陣内正敬(1996)『北部九州における方言新語研究』九州大学出版会
 鈴木一彦・林 巨樹編(1973)『品詞別日本文法講座 4 形容詞・形容動詞』明治書院
 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房

- 副島昭夫 (2001) 「日本語形容詞の述語形式について」『東京大学留学生センター紀要』11
- 高橋明美 (1986) 「秋田県雄勝方言文法に関する一考察」『米沢国語国文』13
- 坪井美樹 (1981) 「形容動詞活用語尾と断定の助動詞——歴史的変遷過程における相違の確認——」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 早田輝洋 (1985) 『博多方言のアクセント・形態論』九州大学出版会
- 樋口文彦 (1996) 「形容詞の分類——状態形容詞と質形容詞——」『ことばの科学』7 むぎ書房
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 松本克己 (1998) 「形容詞の品詞的タイプとその地理的分布」『月刊言語』27-3
- 村木新次郎 (1998) 「名詞と形容詞の境界」『月刊言語』27-3
- 矢島正浩 (1994) 「近世前・中期上方語における形容動詞文——ナ終止・ジャ終止の表現性をめぐって——」『国語学』176号
- Bhat, D. N. S. (1994) *The adjectival category: Criteria for differentiation and indentification*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Wetzer, H. (1996) *The typology of adjectival predication*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

付記 インフォーマントのお二人、またインフォーマントを紹介して下さった塚田実知代氏にお礼申し上げます。本稿は、国語学会2000年度秋季大会で発表した内容を大幅に改訂したものである。発表の際、ご意見・ご教示くださった皆様にお礼申し上げます。

——東京都立大学助手——

(2001年3月26日 第一稿受理)

(2001年7月10日 最終稿受理)

Two types of Adjectival Noun Predicates in the Sasagawa Dialect : A Comparison with Noun Predicates

KONISHI Izumi

Key words: adjectival noun, adjective, noun predicate, assertive, typology

The Sasagawa dialect, spoken in Asahi town, Toyama prefecture, has two types of forms of adjectival noun predicates (*keiyō-dōshi*), *ja*-types and *na*-types. The inflectional pattern of the *ja*-type is basically identical to that of noun predicates, while the *na*-type takes adjective-like inflectional endings.

<i>ja</i> -type	<i>na</i> -type	
<i>shizuka-ja</i>	<i>shizuka-na</i>	'is quiet'
<i>shizuka-jatta</i>	<i>shizuka-na-katta</i>	'was quiet'
<i>shizuka-jarō</i>	<i>shizuka-na-karō</i>	'supposed to be quiet'

The *na*-form, e.g., *shizuka-na*, can be used in the predicative and adnominal position, while the *ja*-form, e.g., *shizuka-ja*, can be used only in predicative position, and cannot be accompanied by modal forms such as the interrogative particle *ka* or the non-assertive form *mitaina* 'it seems that'. In the predicative position, the speaker prefers to use the *na*-form in exclamatory sentences, i.e., sentences that express his/her perception or emotion directly, and the *ja*-form in sentences that declare his/her judgment of truth. From these points it is concluded that the *ja*-form represents the modal meaning of 'assertive' and the *na*-form itself does not represent any subjective meaning.

The forms of the *ja*-type consist of the stem form, e.g., *shizuka*, and the copulative verb *ja*. Similarly, the other forms of the *na*-type, e.g., *shizuka-na-katta*, *shizuka-na-karō*, consist of the *na*-form and the copulative verb /*karō*/. Adjectival noun predicates of *na*-type as well as those of *ja*-type can be regarded as the combination of a noun-like element and a copulative verb for inflection.